

# しいのき



## 道

名誉館長 三 隅 治 雄

どんな道にも、そこを<sup>ひら</sup>き、人が往来し、物が運ばれた歴史がきざみ込まれています。その歴史の集積がおのずから各地の生活文化の特色を生んだと言えるでしょう。だから、われわれは地域文化の成り立ちを調べるのに、まず地図を広げて道の状況を観察し、そしてその道筋を散索することをすすめます。わが中野区にも、大小さまざまな道が拓かれてきました。北部に特に多く<sup>こぢ</sup>ねとした小径は昔の農道の名ごりで、中野が農村であった時代の遺産です。南部には江戸時代初期に拓かれた青梅街道があり、これがあって中野の宿場が繁栄し、周辺の農村も江戸の町への産物供給でうるおったことは周知のとおりです。また新井薬師や堀之内のお祖師さまへの参詣道など、その商店街の成立に欠かせぬ道があり、そして今回哲学堂公園内の発掘で浮かび出た道(上写真)も、明治・大正期の庶民の活気ある足音で賑わった生活の道であったのでしょうか。「道」はつねに人間の生命の<sup>いのち</sup>はずみを感じさせます。

# 文化財よもやま話

## 端午の節句

5月5日に武者人形を飾り、鯉幟を立てる風習は今日一般的にみられます。しかしこの日が男児の祭日とされるようになったのは、そう古いことではありませんでした。

かつて中野には5月5日に菖蒲と蓬を3本ずつ屋根の軒に立てる風習がありました。このような風習は全国的にみられますが、神奈川県津久井郡ではこれを「女の屋根」と呼んでいました。また中部地方や西日本には、5月5日やその前後を「女の家」「女の夜」などと称してこの日だけは女が威張って良いとする地方があり、伊豆大島には4日の晩に家の主人が主婦の尻を菖蒲で叩く風習がありました。

5月は田植えの月とされ、女性は早乙女として田植えの主役を勤め、田の神を迎えるという大切な役目を持っていました。このため「女の家」や「女の屋根」といった風習は、一つの神事である田植えに先立って女性達が忌み籠りをした名残で、菖蒲や蓬を軒に立てるのは、それらの強い香りで不浄をはらい、身を清めようとしたためだと考えられています。つまり端午の節句は農耕儀礼としての要素が強く、本来は男性の祭りと言うよりはむしろ女性の祭りであったと言えます。

このような端午の節句が今日のような男児の祭りとなったのは、菖蒲が「尚武」にかけられ、男児が強くなるようにという願いを込めて座敷に具足を飾る武家の風習が江戸時代に一般化したためだと言われています。また鯉幟は吹き流しが変化したものだと言われています。

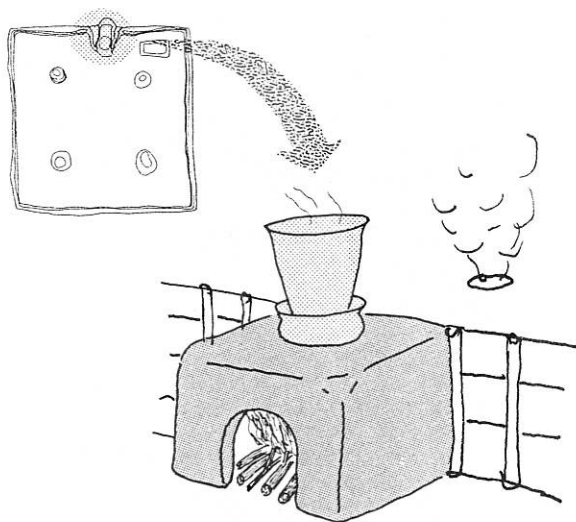


▲「江戸年中行事図聚」より

# 大地に眠る歴史

## 台所物語 4 (カマドの登場)

日本に稲作が伝わって約550年後、3世紀中頃から古墳時代がはじまります。古墳が各地に造られ地域の有力者の存在が誇示される時代でもあります。4世紀末頃から西日本各地に見られはじめたカマドは、5世紀後半には東日本全体にも普及してきます。カマドは今までの炉と比べて、まったく発想を異にした構造をしています。それは図でもわかるとおり、箱形に粘土や石など造り、一方にまきをくべる穴、上に器(甕)をかける穴、そして後ろ側に煙を出す穴を設けたものです。



こういった構造なので、竪穴住居内でも壁の面につけた形で(図上)造られており、今までの中央に火を焚くのと違ったかたちになっています。

つまり、家の中のどちらか一方の壁際につけるということですので、現代の台所の位置と通じるものがあります。むしろルーツと言ってもよいでしょう。このため屋内は広く使えるスペースも確保できたのです。

ところで、カマドのはじまりは、大陸に求められます。この頃大陸では、登り窯(かまど)を用いて硬質の焼き物(この焼き物は日本にも導入されて須恵器と呼ばれています)がつくられはじめており、この登り窯の構造、焚口・煙成室(えんどう)・煙道といった要素が、カマドの祖源になると言われています。

# 古文書つづり

## 区外の古文書

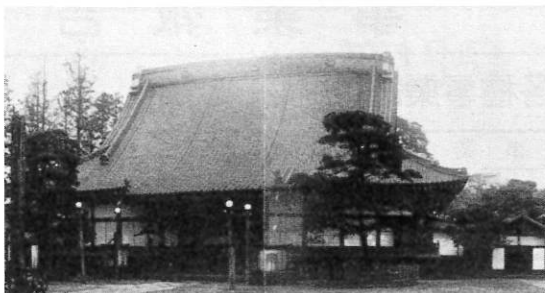
中野区内に伝来した古文書の所在調査はすでに終わっていますが、種々の理由で失われたものも多く、区内の古文書だけでは中野の歴史を跡づけるには不十分です。

たとえば中野の明治維新を考えるさいには、新選組の近藤勇の家族が成願寺に一時身を寄せたとか、上野の戦争に敗れた彰義隊の一派が山崎家で炊出しをうけた等の言い伝えはありますが、記録や文書はありません。

ところが、区外の古文書がこうしたことを証拠づけ、新たな事実を私たちに知らせてくれる場合があります。神奈川県川崎市内の慶応4(1868)年5月の史料には、

手前方には又々仁義隊より差越参り中野村へ呼申候…

古庄兵衛相頼中野村宝泉寺へ出もらひ候…



▲話の舞台宝仙寺(戦前)

古庄兵衛中野村より帰る、仁義隊へ隠岐守様之御家中御出被成候而種々利解被仰聞候故、無扨金十両差出し申候由ニ御座候、昨夜南門ニ而浅田屋へ泊り世話ニ相成候趣ニ御座候…

と見え、宝仙寺が彰義隊同様の「仁義隊」の拠点となっていたことや、遠方の人々を繰り返し呼出して軍資金の差出しを強要していたことが分かります。一見他所のことのようだった明治維新ですが、じつは中野もその真っ只中に巻き込まれていたわけです。

ともすれば区内にのみ目を奪われがちですが、広く目配りをした史料調査が必要な実例です。

## 中野・花見・奉行

落語の三題話ではありません。安政二年(1855)中野にあった侍と町人の出来事です。角筈村熊野十二社へ参詣した老中阿部伊勢守、久世大和守一行が休憩するため、中野村成願寺により座敷を借りたいと申入れたが、当日は天気がよく、お花見の大勢の客が酒宴の最中であり、満員ですと断わられた。我々は老中一行であると名のつた処、寺の者びっくりして、大勢の客へ明けてくれと頼んだが「こちらが先客なり、侍とてこわくなし」と酒が入っているので大騒ぎ、そこへ乗り込できた侍がいた。「我は町奉行井戸対馬守である座敷を明けるように」とのこと。さすがの生酔いの人々も早々と逃げ出したとのこと。

中野に老中、町奉行がきたこと、そしてこんな騒動があったことも、珍しいことなので記録があるのでしょうか。いずれにしろ、四月はお花見の季節です。皆さん人に迷惑をかけないように注意しましょう。

## 中野昔話

### 風呂は肥溜

ご祝儀に行って折詰をもらって帰ってきたところが、狐に化かされて、で、狐がそれをとろろと思ったんでしょう。おそらくねえ。それで、同じ道を行ったり来たり行ったり来たりして、そのうちにくたびれちゃって、「もう家帰って寝るだ」と「まあ、ひとつ風呂浴びるかか」と言って、ま、この辺じゃ、タメ、タメっていうんですけどね、要するに糞溜のことです。それに、入って「ああ今夜の湯はいい湯だ」と言ってたというような話がありますね。じゃそれが、いつごろでだれなのかって言たって、わからないわけですよ。

上高田 男 大正7年生

『中野の昔話・伝説・世間話』より

# 事業報告

## 各種事業経過

事業名	内容	期間
企画展	「暦-描かれた時代-」 第4回「おひなさま展」	引続～1/31 2/13～3/7
講演会	「ひな人形-旧家に伝わるひな祭り」講師 藤田順子氏（人形研究家）	2/28
歴史講座 「交流の 郷土史」	「地域間交流の古代史」 講師 岩崎卓也（筑波大学教授）	1/23
	「武蔵野の渡来人」 講師 加藤 修（女子美術大学教授）	1/30
	「板碑と郷村開発」 講師 縣 敏夫（中世史研究家）	2/6
	「大都市東京の膨張」 講師 藤森照信（東京大学助教授）	2/13
	「獅子舞いと水田開発」 講師 角田 茂（当館主任専門研究員）	2/20
	「都市と村の流通」 講師 伊藤好一（元関東近世史研究会会長）	2/27
	「婚姻と郷土社会」 講師 中島恵子（東洋大学短期大学講師）	3/6
文化財調査	鷲宮地域民俗調査 松が丘一丁目 哲学堂遺跡発掘調査	4/1～継続中 1/18～2/15



▲ おひなさま展を見学する酒井美意子氏

## 寄贈資料一覧

1992年11月5日～1993年1月9日  
敬称略・受入順

資料名	点数	氏名
シコロ付消防頭巾他	4	山崎 清司
羽子板・かんざし・トンビ	3	矢野ヒロエ
昭和10年頃の雛飾り	2組	本町保育園
酒器一式	5	清水茂太郎
石板・ロウ石	3	岡崎 学
カグラサン	1	横山 銀蔵
アイロン	1	藤田 順子
本棚・絵馬・郷土玩具	3	福 蔵 院
江古田四丁目町会旗	1	天野 哲三
巻き尺	1	細井 淳一
刺子	1	伊藤 徳治

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

## NEWS

### \* 新刊案内

「中野区板碑資料集」 頒価 ¥400  
区内所在の全板碑について調査。拓本・実測  
図・銘文等を掲載、考察。

## NEWS



▲ 熱気ムンムン歴史講座

## 入館状況

1992年12月～1993年2月（延70日間）（人）

一 般	社教団体	学校教育	合 計
11,512	1,457	276	13,245

発行年月日 1993年3月23日

編集・発行  山崎記念  
中野区立歴史民俗資料館

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 4中教社第22号)